

グローバル経済と ナショナル・ドレスのファッション・トレンド

インド・ウエスタンとGIプロダクトサリーをめぐる

杉本 星子

京都文教大学総合社会学部 教授

私は南インドのシルク・テキスタイルの研究をしています。そこから関心が広がって、現在はマダガスカルのシルクや日本の絹織物の研究もしています。少し前に出た *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion* (Nakatani, Ayami ed. 2020 Lexington Books.) で紬について書きました。今日はカーディーというインドの布とナショナリズムの関係についてお話ししますが、カーディーは手紡ぎ、手織りの布で、それに対応するのが日本では紬であり、紬と民芸運動の関係です。

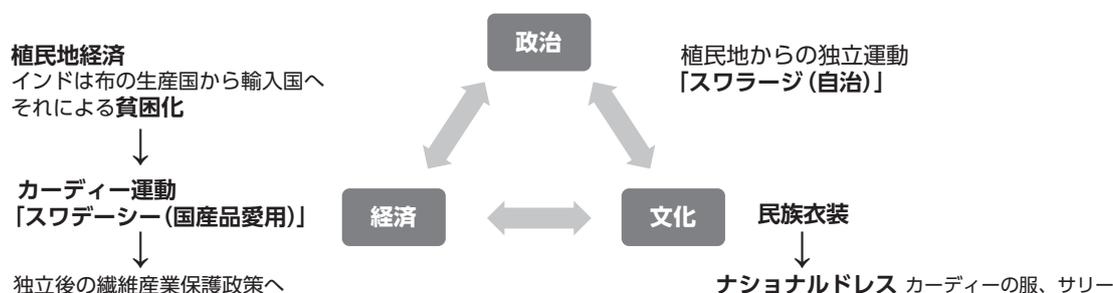
1. インドのナショナリズムとファッション

さまざまな国において、政治と衣服とは大いに関係があります。インドもまさにそうです。2019年の選挙のときには、モディというインドの首相の写真がプリントされた「Modi Saree」というものが売られました¹⁾。まさにインドのナショナリズムとファッションは切り離せない関係にあります。

インドの独立運動におけるファッションとナショナリズムの関係については2009年に出した『サリー！サリー！サリー！』というブックレットに細かく書いてありますので、今日は省略します。私に関心を持っているのは、政治と経済と文化がどう絡み

あっていて、そのなかで人がどのように服を着ているかということです。インドの場合は、植民地からの独立運動という政治の文脈と、植民地経済の文脈がありました。本来インドはたいへん豊かな国だったわけですが、イギリス植民地統治下で貧困化します。その最大の原因は布市場を奪われたからだということで、「スワデーシー」という国産品愛用運動と、もともとあった手紡ぎ・手織りのインドの布「カーディー」を復興しようという運動が起こり、カーディーが独立運動のシンボルになっていきます。そうして独立運動が展開されるなかで、インドは広いのでさまざまな民族衣装があったのですが、そのなかから「ナショナル・ドレス」というかたちでみんなをまとめるような衣装が生まれていきます(資料3-1)。

これにはガンディーのカーディー運動、スワデーシー、スワラージ運動が非常に大きな役割を果たしました。ガンディーが糸を紡いでいる写真をご覧になったことがあると思いますが、そうやって自分たちで布を作ろうという取り組みをします。しかし、実際にはなかなか作れないというわけで、ガンディーは「ガンディーキャップ」と呼ばれる小さな帽子、これだけはせめて被ろうという運動をしていきます。実際にカーディーを作るのは職人なのですが、人々は白いカーディーの帽子と服を身につけて、独立運



資料3-1 植民地期インドのナショナリズムとファッション——政治・文化・経済の関係

1) Modi Sareeについては次のWebサイトを参照。<https://www.bing.com/images/search?view=detailV2&id=0B350666F9FC627BD6CECD1C262FCB2E7709266E&thid=OIP.TJh5vNzZ9vMeiEsX65vM6wHaLw&mediaurl=https%3A%2F%2Fim.rediff.com%2Fgetahead%2F2019%2Ffeb%2F22modi-sari5.jpg&exp=1063&expw=670&q=modi+sari&selectedindex=2&ajaxhist=0&vt=0&eim=0,1,3,4,6,8,10>



資料3-2 マハラニのシフォンサリー
出典:kumar(1999), p.70より



資料3-3 女子学生が着るサリー
出典:杉本・三尾[編](2005), p.71より



資料3-4 サリーを着た女神
出典:福岡アジア美術館(2000), p.39より

動に参加するようになっていきます。こうしてカーデイーの服が男性のナショナル・コスチュームになりました。ムスリムとヒンドゥーでは少しスタイルが異なりますが、素材がカーデイーであるということが大事なのです。独立運動を率いた kongress、すなわち国民会議派の人たちの独特の政治家ファッションも、こういうなかから出てくることになります。

しかし、カーデイーというのはゴワゴワしていて着にくいし、未亡人が着る白いサリーを想起させるために女性には評判が悪くて、ガンディーはカーデイーのサリーを着てほしかったのですが、女性たちは拒否します。

一方、19世紀末から20世紀初頭にサリーがファッション化していきます。イギリスの植民と統治以前はムガル帝国ですからイスラーム国家で、宮廷衣装はムスリムの服でした。それに対抗して、イギリス植民地政府がヒンドゥーの人たちを重用したこともあって、ヒンドゥーの人たちの間で広く使われていたサリーが流行ります。同じ頃、中国との貿易のなかで、パールシーというグループが非常に財力を持っていき、サリーの縁に中国刺繍を施したサリーに洋風のブラウスを合わせるパールシー・サリーのスタイルが、すごくお洒落であり、なおかつ伝統的でもあるということでトレンドになっていきます。さらに、独立運動の中心になったベンガルのタゴール家の女性たちが着ていたニヴィ・スタイルというサリーの着方が流行します。「パッルー」といわれる長い布の端を前から後ろに流すスタイルです。それをラヴィ・ヴァルマーという当時大人気の画家が、女神の絵姿にしてカレンダーに描きます。彼は映画のコスチューム・デザイナーでもありましたから、女優さ

んの衣装として映画の中にも登場させます。またそのころ、外国のものは素敵だということで、上流階級の女性たちのあいだでフランスのシフォン・サリーが流行ります。フランスのサリーは高いですが、ここで日本からそれに似ていてずっと安価なちりめんなどがドットと入ってきて、それを使ったサリーが大流行します。こうして1920年代にはサリーが全国化し、標準化し、ナショナル・ドレス化していきました。

ファッションリーダーのマハラニ、つまりマハラジャの奥さんたちがサリーを着て、女子学生が着て、そしてラヴィ・ヴァルマーがサリーを着た女神の絵を描く(資料3-2~4)。インドの女神というのは戦う女神でもあるので、サリーを着た女神は独立運動のシンボルにもなっていました。ですから、女性はカーデイーは着ませんが、女神が着るようなサリーを着るかたちで独立運動に参加していく。こうしてサリーは、すごくナショナルなイメージになりました。

サリーを着た闘う女神の絵は独立後もずっと描かれています。サリーのイメージの背景には、こういう強い、インドの母としての女神が常に重なっています。国民会議派の元首相ラジーヴ・ガンディーの妻のソニア・ガンディーはイタリア人です。ラジーヴ・ガンディーが暗殺された後、ソニアは国民会議派の重要なメンバーになりましたが、彼女もまた、選挙の遊説には必ずその地方のサリーを着ます。現在は、娘のプリヤンカが政界にはいますが、先ほどの Modi Saree に対して、Priyana Saree も出てきています。

サリーは常にIndianessの象徴のようなところがあります。カーデイーがいわゆる素材としてのインド性を表すとするならば、サリーはかたちとしてのインド

性を、着ることで表現するものになっているのです。

2. 独立後の手織産業保護政策

独立後も、手織り産業は農業に次ぐ就業人口を持つことから、経済政策において重視され、保護されました。手織り産業を維持することは、労働者福祉のうえでも重要です。カーディーが独立運動のシンボルであったことから政治的にも重要です。また、手織りの技術はインドの誇るべき伝統文化でもあります。そのため、農村の小規模繊維産業部門というシルクやコットンのハンドルームとカーディー生産が保護の対象になり、その協同組合はずっと助成金をもらいながら運営されていくことになります。手織り産業の技術継承と技術発展についても、政府はかなり支援しています。インドの国にとって、手織り産業がとりわけ重要な意味を持っていることがわかりかと思えます。

今日お話ししたいのは、それが現代になってどう変化してきているかということです。とくに1985年が大きな分岐点になっています。この年に、The Handloom Reservation and Articles for Production Actという法律ができます。先にお話ししたようにインドでは独立後もハンドルーム産業を守ってきたのですが、この時期になると全体にとっても衰退していききました。でも何とか守らなくてはいけないということで、手織りの22品目については機械生産で置き換えてはいけないとリザーブする、そこだけを特別領域にするわけです。その品目のなかにピュア・シルクやピュア・コットンのサリーが入っています。それには、パワールームなどが手を出してはいけないということです。パワールーム産業や織機のテクノロジーの発展による脅威から、手織りサリー部門を何とか守っていかうという政策です。

1990年代になると、ラオ政権が経済自由化に大きく舵を切って、新経済政策をとります。そして、いつまでも手織り生産を守ってはいけません。経済発展できないということで、リザーブの品目をどんどん減らしていきます。それまでは繊維産業の雇用を守る方向でしたが、そこから輸出産業育成に完全に舵を切っていきます。2005年には多国間繊維協定も撤廃され、輸出もしやすくなっていくという経緯があって、輸出産業としてのテキスタイル産業の振興が、インド政府の方針として明確になっていきます。

そうしたなかで、手織りの再定義が行われます。それまで手織りというのは「手で作ったもので、パワールームで作られたものではないもの」という定義でしたが、ここで「ハイブリッドもあってよい」になり、さらに「どこかの場面で手がきっちり入ってさえいれば手織りと認めよう」ぐらいのところまで緩めた再定義をしてしまいます。さらに、2015年ぐらいから、リザーブを完全に撤廃してしまおうというパワールーム協会の強い圧力がかかってきます。そういう状況のなかで、現在も手織りサリーが作られています。

3. 経済発展とサリー・ファッション

経済発展のなかでの手織り産業を、ファッション産業との関係から見ると、1990年代の経済開放以降、すごく成長しています。中間層が拡大し、シルクサリーを買える層も広がっていきました。このあたりも興味深いところで、『サリー！サリー！サリー！』に書きましたが、地方やコミュニティによってそれぞれ独特のサリーの着方や素材があったものが、ここでさらに均質化していく。都会の大きな店を通していろいろなものが買えるようになって、お金を持った中間層は、個人のワードローブをいろいろなサリーで満たすようになっていきます。

本当に貧しい人は数枚だけで着まわしていますが、ある程度お金がある層はサリーを20から30枚持っているのが普通です。ちょっとお金持ちになると500枚ぐらい持っていたりするわけですが、その中身が、前は儀礼用のものと普段着からなりましたが、そこにファンシーサリーという化繊の外出着がたくさん加わってきます。お金持ちの奥さんも、ちょっとした外出程度でしたらシルクでしたが、化繊でもいいわということになって、ファンシーサリーの生産が伸びていきます。儀礼用はあいかわらずシルクですが、貧しい人たちは、一見シルクに見える化繊の紋織という、見た目はまったく同じものを着るようになります。ですから、表面的にはみんな同じようなものを着ていて、結婚式はみんなキラキラするみたいなかたちで、まさに中間層が拡大している状況がよくわかります。

こうしたなかで、日本の着物と同じようにサリー離れも起こってきます。シャルワール・カミーズという、もともとはイスラムの服が学校の制服に採用さ



資料3-5 デザイナーズ・サリー
出典：杉本・三尾[編] (2005), p.21 より

れて、さらには普段の外着としても少しずつ人気が出てきます。かつては、ある程度の年齢の女性たちはサリーを着るものでした。初潮を迎えたら女性はみんなサリーだったのですが、次第に「シャルワール・カミーズでいいわ」という風潮になっていって、サリー全体の需要が落ちていきます。そうすると売れるほうは必死になりますので、ブランド化を始めます。日本の着物の高級化と並行するような感じで、デザイナーズ・サリーがどんどん登場してきます(資料3-5)。

デザイナーズ・サリーといっても、サリーというかたちは変わりません。ここでデザイナーが目にするのが手工芸です。サリーには先染め、後染めがありますが、基本は織りであって、刺繍などはなかったわけです。刺繍はとくにムスリムの服に多用されていたのですが、デザイナーはそれを組み合わせるかたちで、インドの伝統のサリーに手工芸をフルに使っていきます。そして、とくに若い人たちが結婚式の儀礼ではKanchipuramのシルクサリーという定番を着て、披露宴やパーティーはデザイナーズ・サリーでというかたちで両方着るようになっていきます。

こうして、もともと伝統的な刺繍職人の村にいた職人たちが大都市に移動して、有名デザイナーに雇われるようになりました。すごく皮肉ですが、このブランド化によって、高度な手工芸が生き延びているというのが現状です。このように手工芸のブランド化とサリーのブランド化が並行して、新しいファッションが生まれました。

サリー・ファッションの、もう一つの変化が技術革新によるものです。コンピューター・デザインが導入されます。こうなるといくらでも精緻なデザインを作ることができますので、毎年さまざまなデザイン



資料3-6 技術革新——コンピューター・デザインのサリー
筆者撮影

を競っていくようになります。お店のほうはディーワリーという火のお祭りのときに、資料3-6のような巨大な新作サリーの写真を出します。これを「フォト・サリー」といい、「今年はこの色が売り」という新しい色や模様や着方を提案していきます。こうしたプロモーションによって、普段は化繊のサリーを着ているけれど、お祭り用に高価なシルクのサリーを買うようになります。

そういうなかで Theme Saree というものが出てきました。最初にご紹介した *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion* では、これについて Aarti Kawlra というインドの研究者が書いていますので、興味のある方は読んでいただければと思います。どんなデザインでも作れますので、ラヴィ・ヴァルマーが描いたいわゆるインドの美しい女性の絵画であったり、マハーバーラタの神話とか、クリシュナという神様とか、手の込んだ図柄のサリーがどんどん出てきて、ものすごい値段で売られています。Kawlraさんは、これを文化遺産、「ヘリテージとしてのサリー」と捉えて、“Traditionally Trendy”を論じています。技術革新を使って、ある意味の伝統というものを復活させていく。それをトレンドイなものにして、高いサリーを売っていくという販売戦略です。

4. 地理的認証制度の導入

こうして都会の大きなサリー店ではさまざまな販売戦略を駆使してサリーを売っていますが、生産地はどんどん衰退しています。そうした生産地の衰退を何とかしたいというところから、売れ



資料3-7 Geographical Indication tags

出典: <https://www.clearias.com/geographical-indication-gi-tags-india/>

ばなんでもいいとコピー商品も出てきます。とくにKanchipuramのような儀礼用の高価なサリーを作っているところはどんどん真似されて、インド中でKanchipuram風のサリーを作っているといったような状況になってきています。そこで1999年に地理的認証法 the Geographical Indications of Goods (Registration and Protection) を制定して、現地を守るという政策をとります(資料3-7)。

地理的認証制度はインドだけではなく、同時代的にさまざまな国や地域で実施しています。日本にももちろんこういう制度がありますので、世界的にいろいろな議論ができるテーマかと思います。GI Tagsが付いたものが、インドでも1990年代終わりから2000年代になって出てきます。ちなみに、これはサリーだけではなくすべての物品を対象とした制度です。第一号は「ダーズリン・ティー」です。

Kanchipuramのシルクサリーはすぐに組合が申請して、2005年からKanchipuram地域で作ったものしかKanchipuram Sareeと言えないことになりました(資料3-8)。2009年には、Banarasiのサリーも認証されます。南のKanchipuramに対して、北のBanarasiと言われている二大サリーの一つです。他にもさまざまな地域が、ここでしか作れない伝統的なサリーだとを主張して、GIタグと、Handloomマーク、SILK MARKといったものをつけていきます(資料3-9、3-10)。日本の着物にもいろいろな認証書

資料3-8 Geographical Indicationの例

2005年	Kanchipuram Silk Sarees, Kota Doria Sarees, Pochampalli Ikat Sarees
2006年	Madurai Chungudi Sarees, Coimbanetore Kora Cotton Sarees
2007年	Orissa Ikat Sarees
2008年	Arni Silk Sarees, Kasaragod Sarees
2009年	Banaras Silk Sarees, Uppada Jamdani Saarees
2010年	Balaramapuram Sarees
2019年	Thirubuvanam Sarees, Kandangi Saress, Venkatagiri Sarees



資料3-9 (左上)Handloom認証、3-10(左下)Silkmark認証、3-11(右)保証書

出典: <https://www.clearias.com/geographical-indication-gi-tags-india/>

がついていますが、同じようにタグをつけて、品質保証をすることになります。そうしたサリーを買うと保証書が付いてきます(資料3-11)。

こうした動きの背景にあるそれぞれの地域の事情についての詳しい説明は省略しますが、たとえばBanarasiでは中国製のイミテーションが1990年代から2000年代に大量に入ってきて、職人が半減するぐらいの危機的状況になっています。それがGI認証の申請につながりました。KanchipuramではGI Tagsをつけてみたら、かえってその縛りがきつくて値段が高くなってしまって、逆にそれをもっと緩めてくれみたいな動きが出ています。やはりそれでも若者たちは、織工をやめてどんどん工場に行ってしまうというのが現状です。

5. モディ首相のテキスタイル政策

そうしたなかで、現在のモディ首相のテキスタイル政策が出てきています。

彼が首相になるのは2014年です。私がこれまで語ってきたことは、その前の国民会議派政権がやってきた政策ですが、彼のテキスタイル政策は基本的にその流れに乗っています。けれども、ここでモディ首相の経歴を見ていただくとわかるように、彼はグジャラート州の首相をしていた人で、グジャラートは繊維産業の中心地です。しかもBanarasiのコミッ

資料3-12 Narendra Modi(1950~)首相の経歴

2001~ Chief Minister of Gujarat
2014年 The Member of Parliament for Varanasi

2014年~ Prime Minister of India

- A member of the Bharatiya Janata Party (BJP) and of the Rashtriya Swayamsevak Sangh (RSS)
- A Hindu nationalist volunteer organisation

ティーの委員も経験していますから、彼は繊維産業を気にしているというか、非常に意識しています。

もう一つの彼の特徵として、BJP、ヒンドゥー至上主義との近接性が挙げられます。RSSというのはまさにBJPの軍隊みたいなところ。かなり過激な若い人たちもけっこうRSSにいますが、モディ首相はそういう団体のトップでもあります。彼が首相に就いてから、インドのヒンドゥー至上主義は非常に強くなっています。

2017年のカーデイーの組合のカレンダーに、彼は糸車を回す姿で登場して²⁾、「お前はガンデイーに成り代わろうとしているのか」と大批判を受けました。でも彼はまったくめげないで、「インドの国はスワデーシーが根本だ」と言って、ガンデイーのカーデイー政策を「新スワデーシー政策」というかたちで引き継ぎながら展開しています。

かつてのスワデーシーと違うところは、彼がファッションとテキスタイルの輸出産業化を中心に挙げている点です。彼はとくに、ファッションの先進国となることでインドのテキスタイルの輸出を増やしたいと考えています。カーデイーのような手紡ぎやサリーのような手織りの紋織技術も、輸出産業のなかに入れていきます。とくにカーデイーについては、若者向けのファッションにすることを強く訴え、若者たちにスワデーシー、すなわち国産品のカーデイーを買え、それを着ろと言っています。インドフェアがあると必ずカーデイーのお洒落な製品を出して、手織りの布を使ったファッションとインドのテキスタイルを売り込むという戦略です。

彼は2016年には“Khadi for Nation, Khadi for

Fashion”、2017年には“Khadi not a cloth, but a movement to help the poor”と言っています。こうしてカーデイーのファッションとナショナリズムを結びつけているわけです。2019年も、デザイナーと組んでカーデイーをプロモーションをするプログラムにかなりの国家予算をつけています。興味深いことに、一昨年ぐらいから、モディが着ているカーデイーのジャケットが流行しています。BJP政党の人たちはこれを「Modi Jacket」と呼び、国民会議派の人たちはカーデイーのジャケットの大元はネルーだから「Nehru Jacket」と呼ぶべきだといった議論をしています。自分自身が流行を作り出す側にも立ってしまったという面白い展開です。

6. グローバリゼーションとファッション・トレンド

世界全体の経済や政治の動きのなかでファッションを捉えてみると、もちろんトラディショナルなものもありますが、若い人たちはやはりグローバリゼーションのほうに関心をもっています。サリーやシャルワール・カミーズを着るとしても、西洋のドレス的な着こなしをするIndo-Westernというものが流行っています³⁾。

Indo-Westernのなかには、Fusion Saree⁴⁾と呼ばれるものもあります。資料でお見せしている写真を見ると、たしかにサリーだけでも、完全にヨーロッパのドレス的な着方です。下に履いているパンツもネットです。

Indo-Western、Fusion Saree、そして2016年ぐらいからはPant Saree⁵⁾というかたちが出てきています。サリーとパンツを組み合わせる。足を出さないということは、現在でもインド女性のたしなみとして重要です。西洋服が大量に入ってきて、ジーンズも大流行しますが、ミニスカートはあまり流行しません。現在ではインテリの女性はほとんどがパンツルックです。あるとき何人かの大学教員の友だちと話をしている、ふと気づくとシャルワール・カミーズを着ているのは私だけで、インド人はみんなパンツ

2) 2017年のKhadi Village Industries Commission (KVIC) のカレンダーについては次のWebサイトを参照。https://www.rediff.com/news/report/protests-as-modi-replaces-mahatma-gandhi-in-khadi-commission-calendar/20170113.htm

3) Indo-Western スタイルおよびIndo-Western Lookについては次のWebサイトを参照。https://www.pinterest.jp/pin/448882287858234055/, https://www.southindiafashion.com/2018/07/different-modern-saree-wearing-styles.html

4) Fusion Sareeについては次のWebサイトを参照。https://www.pinterest.jp/pin/537828380492657784/

5) Pant Sareesについては次のWebサイトを参照。https://www.southindiafashion.com/2016/06/glamorous-ways-wear-pant-style-sarees-look-like-fashion-diva.html

ルックだったという、それぐらいインテリ女性は普段はパンツルックで、儀礼のときだけサリーです。

若い人はパーティーや儀礼のときもパンツルックと合わせようというわけで、必ずしも西洋的なものだけではなくて、いわゆるチュリダールというムスリムの人たちが着ていたパンツを履くことがあります。また、かつてはバラモンが非常に長いサリーをパンツ風に巻き付けていましたが、それをちょっと短くして着るとか、あるいは完全に違うかたちで着る。こういったファッションが若い人たちの注目を集めています。Mix and Match⁶⁾ということで、Anarkaliというある地域の民族衣装の上着とサリーを組み合わせているものもあります。

ここまで見てきたのは、ほとんどがヒンドゥーの人たちのファッションですが、そうしたトレンドに対してムスリムの人たちのファッションはどうなっていくかということが気になっています。イスラーム世界の全世界的な保守化の動きを受けて、インドでも2000年代に入ってから、黒いブルカを着る人たちが増えてきました。昔ももちろん着ていましたが、宗派によって色が違って、白であったり、カラフルな色も多かったのですが、今は黒が増えてきています。

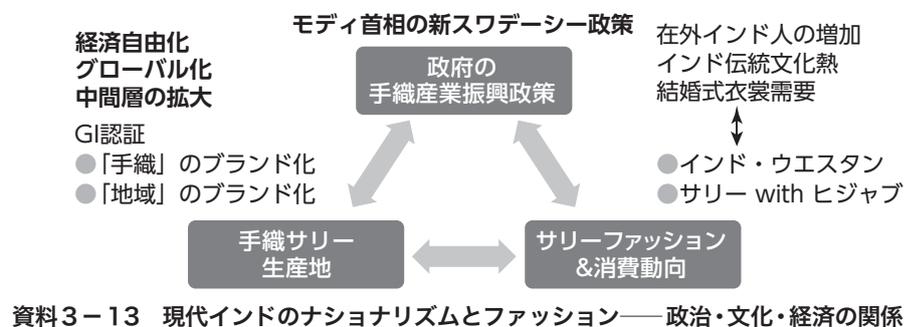
しかし、ムスリムといってもインドは広いので、西ベンガルや南インドでは普段着はサリーです。ですから、ブルカの下には色とりどりのサリーを着るというのがもともとの着方でした。2010年にイスラーム系の学校で、ブルカを着ていない女性教師が吊し上げを受けたという報道がありましたが、そのことでもわかるように、イスラームの人たちがファンダメンタルな傾向にかなり行っているというのが、2010年代以降の傾向です。

ところが、近年になって出てきたのがSarees with Hijabです⁷⁾。イスラームの人たちが外に出るときには、上にブルカをかぶっていたわけですが、こうしたかたちでヒジャブをかぶればサリーを着て外に出られるというわけです。自分がインド人であることを強調しながら、やはりイスラームのアイデンティティも主張していく。これが一昨年ぐらいからかなり流行して、ファッション雑誌にもどんどん出てきています。

そのなかでも興味深いのが、ケーララ出身のマレーシア在住のインド人の女の子が結婚式で着ている服です⁸⁾。結婚式では、海外に行ったインド人も自分のルーツの儀礼服を着るわけです。ケーララにはGI認証も受けているケーララ地方特有のサリーがありますが、それを着てヒジャブを着けています。

在外インド人とインドの関係は、経済開放以降政治的にも注目されています。PIO(People of Indian Origin)というのは「印僑」と呼ばれる海外に古くからいる人たちで、NRI(Non-Resident Indians)というのがわりと最近になってから国外へ出て、インド国籍を持っている人たちです。PIOは現地の国籍になっています。2,000万と言われる在外インド人のなかには成功している人もたくさんいますから、1990年代末から2000年代初めにかけて、PIOに対してOCI(Overseas Citizen of India)、選挙権はないけれども投資はできるし、行ったり来たりも自由な、ほとんど二重国籍を認めるような政策を出して、彼らの資本を本国へ引っ張り込もうという政策を進めています。また、「在外インド人の日」を設けてお祭りをしたりもしています。

私はモーリシャスやマダガスカルでインド系住民



6) Mix and Matchについては次のWebサイトを参照。https://blog.mirraw.com/2019/02/28/10-mix-and-match-indian-ethnic-wear-ideas-to-get-into-western-look/

7) Sarees with Hijabについては次のWebサイトを参照。https://stylesatlife.com/articles/indian-hijab/

8) 詳細については次のWebサイトを参照。https://www.malaymail.com/news/life/2019/08/22/bridesmaid-rocks-hijab-with-traditional-malayalee-saree-for-friends-wedding/1783138

の調査をしていましたが、10年以上前、その人たちはインドに行ったこともないし、長年本国とほとんど離れていて、まったく独特のヒンドゥー教を信仰していました。しかし、このころからインドと太いパイプを作って、行ったり来たりするようになり、在外インド人の間にヒンドゥー文化、踊りや音楽、儀礼に対する関心が高まっていきました。そうした在外インド人の多いところが、現在、インドの老舗サリー店のオンライン・ショップのマーケットになっているわけです。

実際に、老舗のサリー店がロンドンやアメリカの大都市に支店を持つことが本格化しています。それとモディ首相のナショナルスティックなスワデーシー政策、ファッションのIndo-WesternやSarees with Hijabの流行が連動している感じもします。経済自由化、グローバル化、中間層の拡大のなかで、政府の政策と、産地が何とかして生き延びようという動きと、マーケティング、ファッショントレンドが、このようなかたちで絡んでいるというのが現状です。

おわりに

最後に、この研究会のテーマである現代世界のナショナリズムとファッションについて改めて考えてみたいと思います。20世紀のナショナリズムというのは、外国対自国という対立の構図の中で現れてきました。自国とは国民国家、ネイション・ステイトですから、ナショナルドレスはネイションの象徴でした。そこにサリーやカーディーが登場したわけです。しかし21世紀のナショナリズムは質が違ってきていて、グローバルな空間とナショナルな空間が、ある意味で通底している。実際にナショナルな空間は多民族・多文化化している。その一方、グローバルな空間のなかで自国・自民族中心主義が主張され、国内でも自民族中心主義が強調されて、排他的になっている。先ほど言ったRSSというヒンドゥー至上主義団体の若者たちは、みんなカーディーの帽子をかぶって、カーディーの服を着ています。それと同時に、モディ首相が「ファッションでインドを売ろう」としています。民族衣装のワールド・ファッション化です。ちょうど、民族音楽のワールドミュージック化のようなことが、ファッションでもさまざまところで起きている。そこにもカーディーがまた登場したりする。

私はマレーシアのインド系の子のSarees with

Hijabが典型的な例ではないかと思うのですが、一人が多重なアイデンティティを持っていて、そうしたアイデンティティの一つの表象としてのエスニック・ドレスという役割が、現代において出てきているのではないのでしょうか。ファッションとしてのエスニック・ドレスというものは、一方でものすごくナショナルなのだけれども、しかし、それがファッションである限りナショナルをすり抜けてしまうものでもある。そういうことが世界全体で起きているのではないかと思います。

参照・引用文献

- Arterburnm Yvonne J. 1982 *The Loom of Independence: Silk-Weaving Cooperatives in Kancheepuram*. Delhi: Hindustan Publishing Corporation.
- Arivukkarashi, N. A. and K. Bagaraj 2009 “Some Aspects of Socio-Economic Change in Rural Arni —with the Special Reference in the Silk Weaving Industry”. *Madras Institute of Development Studies*.
- Emma Tarlo 1996 *Clothing Matters: Dress and Identity in India*. University of Chicago Press.
- Jayaval, R. 2013 “Blow of Textile Industry on Member Weavers’ of Silk Handloom Co-operative Societies in Kanchipuram District”. *Asia Pacific Journal of Marketing and Management Review*, Vol.2(4), pp.22-29.
- Kawlra, Aarti 2014a “Duplication the Local: GI and the Politics of “Place” in Kanchipuram, Tamil Nadu.” *NMML. Occasional Paper, Perspectives in Indian Development NS 29*. Nehru Memorial Museum and Library.
- Kawlra, Aarti 2014b “Sari and the Narrative of Nation in Twentieth Century India.” In *Global Textile Series 20*. Oxford: Oxbow Books.
- Kawlra, Aarti 2020 “Between Culture and Technology: Theme Saris and the Graphic Representation of Heritage in Tamil Nadu, India”. In *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, edited by Nakatani Ayami Lexington Books. pp.99-115.
- Kumar, Ritu 1999 *Costumes and Textiles of Royal India*. London: Christie’s Books Ltd.
- Raman, Vasanthi 2010 *Warp and the Weft: Community*

and Gender Identity among Banaras Weavers.
London: Routledge.

杉本星子 2009年 『サリー!サリー!サリー!インド・ファッションをフィールドワーク』京都文教大学文化人類学ブックレット2. 風響社.

杉本良男・三尾稔編 2005年 『装うインドーインド・サリーの世界』国立民族学博物館.

福岡アジア美術館 2000年 『生活とアート I インドのカレンダー・アートー女神からピンナップへ』福岡アジア美術館.

■ 質疑応答

後藤絵美(司会) 三つのお話が重なってきていますが、どうでしょうか。インドの新しい情報もたくさんいただきました。

貴志俊彦 たいへんおもしろい、興味深いお話でした。勉強になりました。一つだけ教えてほしいのですが、GI Tagsを認定するという仕方についてです。こういうことをすると、すぐ地域性で紛争が起こりそうな気がするのですが、そういったことに対して、どのような保証や機構があるかについて教えてください。

杉本星子 本当にそこは難しいところです。まず法律ができて、その後、中央政府が南インドのチェンナイにGeographical Indication Registryという大きな組織を作りました。ここが受付をして、調査や調整をします。たとえばBanarasiサリーの産地には中心地がありますが、さらにそこから広がった地域でも作っていますので、どこで線引きするかというのはまさに死活問題です。そのあたりの調整や調査をこの組織がやることになります。最近ではKumbakonamのサリーが認定されました。ここは私の調査地でしたが、認定に6年かかりました。調整にすごく時間がかかったのだと思います。

貴志 紛争になって裁判になることはありますか。

杉本 あり得るかもしれませんが、そこまで調査ができていません。ただし、Kanchipuramなどを見ると、「この路地のここまでが範囲だ」と決めていると、その路地の向かい側でパワールームで作っているんですね。ここが微妙で、向かいですからね。インド人らしいというか、そういう賢いやり方でやっているところもあるかなと思います。裁判というよりも、打開策をそれぞれがしているのかなという気がします。

貴志 もう一つ教えてほしいのが、ハンドルームアクトが1985年にできて、それが2015年頃には機械での置き換え不可というリザベーションが廃止されて、パワールーム協会がかなり政治的圧力をかけたということでしたが……。

杉本 まだ廃止されてはいません。ずっと圧力をかけて、ここはまさに裁判沙汰になりそうな戦い方をしています。他の品目はほとんどはずされましたが、手織りシルクサリーは必死に守っている。実質的には、ハイブリッドルームが認められましたから、手織

りと言いながらマシンメイドにかなり近くなってきているのが現状です。だからリザベーションにする意味はないだろうという状況にはなっています。

帯谷知可 たいへん興味深くうかがいました。ありがとうございます。おそらくサリーというのはドメスティックな市場が多様で、強くてということだと思いますが、たとえば欧米の有名ブランドなどがサリーを作り、市場に参入していることもあるのでしょうか。

杉本 先ほど資料として出したマハラニが着ていたのはフランスのデザイナーのサリーですが、そのように欧米の方に注文するときもあります。いまエルメスがシルク・スカーフの技術を使ったサリーで、インドに売り込みをかけています。成功するかどうかはわかりませんが、すごく話題になっています。

森理恵 ネルー・ジャケットあらためモディ・ジャケットという話がありましたが、お洒落なカーディーというのはどんなものですか。

杉本 持ってくればよかったですね。ネットを見ていただくと、すぐ出てくると思います。まさに「こういうカーディーの着方もありだよね」みたいな……。

森 カーディーでもサリーを作るということですか。

杉本 カーディーでもサリーを作ります。もともと独立運動のときに、ガンディーはカーディーのサリーをみんなに着てほしかったわけです。

森 それはボテッとしていたわけですね。

杉本 薄くてもゴワゴワしているんですね。あのころからずっとサリーは作り続けています。カーディーを作るコテージ・インダストリーは、サリーも重要な売り物にしています。ワードローブの中には、お金持ちなら一つぐらいは持っているかもしれません。

森 カーディーというと、勝手に、生成りで色がなくてものたりないというイメージを勝手に持っていたのですが、ぜんぜんそうではないということですね。

杉本 新しいものは、いろいろな色をつけていたり、着方もいろいろにしていたりします。

森 本来はコットンですか。

杉本 コットンが基本です。独立運動を率いて最初の首相になったネルーは、ものすごくお洒落でお金持ちの出身なので、カーディーのコットンのゴワゴワが嫌だったのですね。ですから、「シルクカーディー」みたいな言い方をして、「手袖で手織りなら、みんなカーディーだ」みたいな……。基本はコットンですが、インドで作ったシルクで、中国シルクではな

いということ……。ただし、普通は手紡ぎで手織のシルクはカーディーとは言わないです。カーディーは、やはりトラディショナルにはコットンです。が、シルクのカーディーもファッションの場ではすごく出てきています。

森 もう一つ、初潮を迎えたらサリーを着るのですか。

杉本 もともとはそういう雰囲気がありました。それまではハーフサリーといって、ブラウスとスカートの上に、半分ぐらい長さの短いサリーをまもっていました。それが高校生の制服だった時代がありますが、それはダサイということで、ハーフサリーはほとんど見られなくなりました。今では、シャルワール・カミーズというイスラーム系のクルタが制服になっています。現在はかなりの年齢の人までそれで育っているので、サリーは着物と同じで着にくいということで、普段はほとんどそちらを着ています。

森 いまサリーを着るのは、特別な場合だけですか。

杉本 そんなことはないです。普通でもけっこう着ていますが、都会のエリートはパンツスーツになっています。でも田舎へ行けば、おばさんたちはみんなサリーです。いまだにかなり着ています。大都会のエリート層は着なくなったし、若い人は着られなくなっていますが、田舎はやはり依然としてサリーかなど。少なくとも結婚したらサリーが基本だろうというのは、常識的にはまだかなり根強いかなとは思っています。

森 途中で普段着用、外出用、儀礼用のサリーができたところが非常に興味深いと思いました。これは少し前ということですか。

杉本 化繊サリーが一般の普段着サリーとして、普及しています。逆に手織りのコットンのサリーは、GIタグをもらってお洒落になるような、そういう傾向があるといえるような感じになっています。

後藤 グローバリズムとファッション・トレンドというお話は、何年ぐらいのことですか。

杉本 経済開放後、とくに1990年代の終わりぐらいには、そういう雰囲気になっていました。早くは1980年代後半です。これについて有名な女性雑誌を分析したことがありますが、かなり早い段階からMIXのファッションなどが出てきています。ナショナルリズムのファッション自体、「ヨーロッパ・ファッション」対「自分たちのファッション」という関係性のなかから生まれましたから、ある意味では、そのころからIndo-Western的なものはある。ただし、ファッ

ションとしてIndo-Westernがバーンと出てくるのは、1990年代終わり、2000年代が一番かなという気がします。

後藤 エジプトのヴェールのファッション化と時期的にちょうど重なるので、興味深いなと思いました。ありがとうございました。

フロアから 先ほど、同じエスニック衣装である着物への言及がありましたが、着物については、たとえば先日ハリウッド女優のキム・カーダシアンが、「キモノ」という名前のブランドの下着を出して、欧米人が表象するキモノと実際のキモノとのずれがグロテスクだということで、業界団体なり、着物好きの方から抗議を受けるという事件がありました。その彼女が出した下着のブランドに「キモノ」という名前を付けた理由として、自然であるとか、着やすいとか、女性のがびのびしやすいとか、そういうイメージを出したいがために、キモノというブランド名を付けたということでした。キモノに対して欧米人がそのように利用しているということがありますが、サリーについて欧米人はどのような表象を持っているのでしょうか。あるいは向こうの有名人などが身につけて、これが異文化に対する理解があると周りで見られるとか、そういう事例があれば教えてください。

杉本 キモノについては小形さんがご専門だと思いますが、サリーに関して言いますと、先ほどモディ首相が「ファッションを売る」と言いましたが、インドでは安倍首相が言い出すよりもっと前に、ファッション・テクノロジーに注目し、ファッションの専門学校を作ってデザイナーを積極的に育てています。そのなかでイギリスやアメリカで活躍しているデザイナーがけっこういます。そうしたデザイナーのお客さんである女優さんや貴族の奥さんなどは、そのデザイナーがデザインしたサリーを着てパーティーに登場することもしどきあって、それも話題になったりしています。

着物と違うのは、着物はある意味で、部屋着とか下着的なかたちで欧米に入った経緯がありますが、インドのサリーはむしろ布として入りました。カルカッタあたりでサリー用に作られていた非常に薄いチンツが送られて、向こうで洋服に作られるというかたちの入り方です。サリーそのものではなく素材で行っているわけです。なので、かなりそこは違うかなと思います。

フロアから 欧米人のサリー着用の需要もあるので

すか。

杉本 先ほどの、お金持ちのパーティー着で話題になるぐらいです。前に「装うインド (Fashioning India)」という展示を国立民族学博物館がしたときには、欧米の人たちのまなざしから見たサリーというものも論じました。でもサリー自体は、アジアのものというイメージは変わっていないのかなと思います。